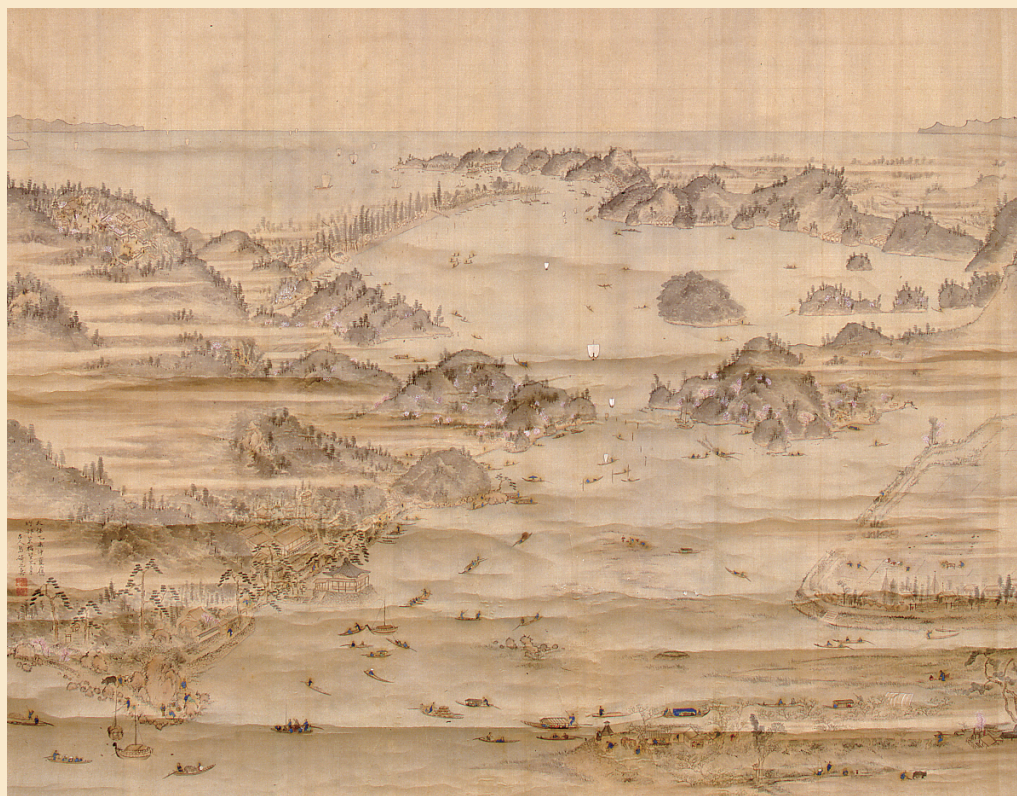


令和 3 年度 第71回高知県芸術祭

第50回高知県文芸賞 入選作品集

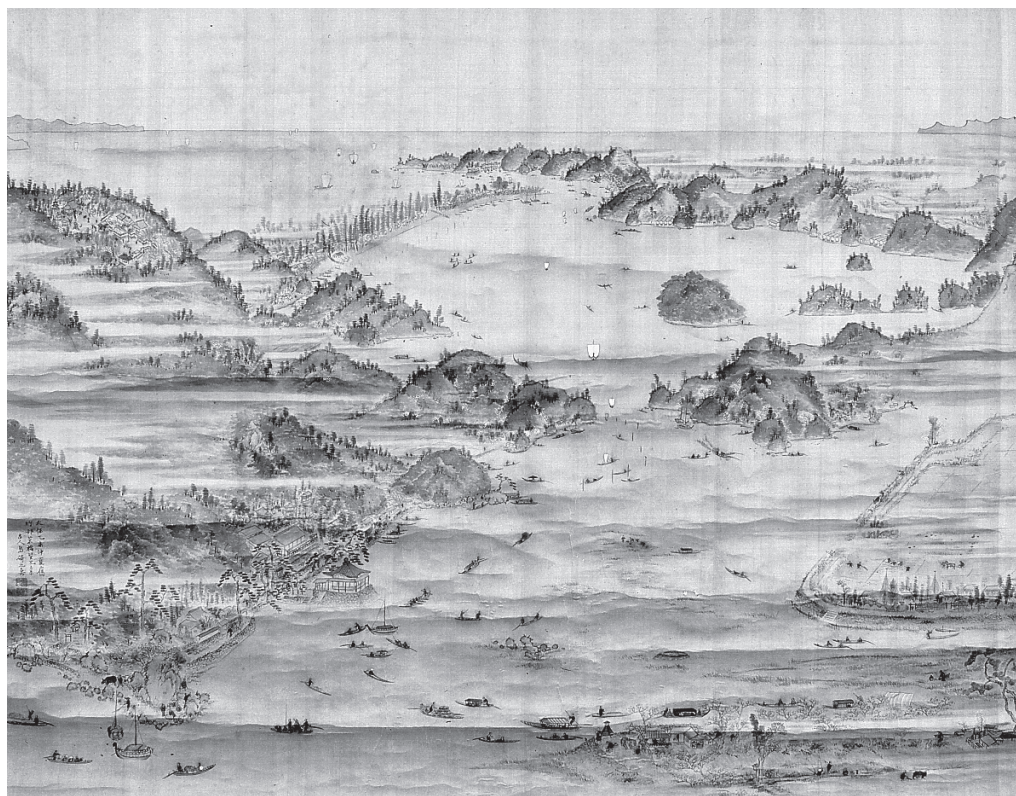


島崎呉江《吸江図》、高知県立美術館寄託

令和3年度 第71回高知県芸術祭

第50回高知県文芸賞 入選作品集

文芸賞・文芸奨励賞・佳作



島崎呉江《吸江図》、高知県立美術館寄託

〔短編小説〕

高知県文芸賞

遺文芸賞

高知県文芸奨励賞

正午の人の誓

臆病者の誓

佳 虎杖の作

花

.....

柳瀬川 ひろし 16

〔詩〕

高知県文芸賞

高知県文芸奨励賞

椅子の風存

孤獨の風存

ありがと

望月ノ

人

佳 紅葉の作

ガイトの願

日ごとの願

一日雇いの願

一期一の願

会歌

手

影

.....

山崎 静香 1

もくじ

〈短歌〉

高知県文芸賞	中屋優菜・梶原和歌・藤田あかり	多田真理子	45
高知県文芸奨励賞	公文正子・川渕湧三		45
佳作	山下昭文・うちだゆみ・佐野美麗 山本莉緒・池田育子		47

〈俳句〉

高知県文芸賞	山本千秋・植木穂花・浜田節	中村竹子	49
高知県文芸奨励賞	大窪雅子・島崎有造		49
佳作	古田彩香・岡田璃奏・中脇柚羽 千里日月・柴口美紀・山崎葉 乾真紀子・太田永吉・中森鶴子 西込とき・栗坂海馬		51

〈川柳〉

高知県文芸賞	吉尾光生・井上志津・森本幸美	大野充彦	55
高知県文芸奨励賞	富士田三郎・森口咲空		55
佳作	岡林裕子・古田彩香・渡辺俱康 北川鉄男・山崎光子・垣内のぶ 大坂祐牙・門田彩愛・松本征慈 伊勢本志音		57

〈審査評〉

〈作品募集要項〉

審査評		61
作品募集要項		66

短 編 小 説

遺影

香美市 山崎 静香

けさ、庭に白彼岸花が蕾のままセロリのような瑞々しい莖をすくと伸ばしているのを見つけた。二本が寄り添い支えあっている。この花が咲けば大栃方面の山畑もそろそろかなと、愛用のカメラを持ち物部川上流を目指した。県道は狭くてカーブが多い。時どきダンプカーが覆いかぶさってきて戸惑う。しばらく走ると知り合いの滋さんの家が見えてきた。徐行しながら窓越しに滋さんは居るだろうか、ちらりと見たが、

『裏にいます 声をかけてネ』

表にいない時はダンボールの切れ端に大きく書き軒下にぶら下げたあるのに見えない。帰りに寄ることにして先を急いだ。

集落に入ると瓦屋根の旧家が空き家になってい

たり、蔦がからみ軒が半分崩れている廃屋が目につく。道路下の廃校の運動場にヘリポートができ吹き流しがはためいている。しばらく来ないと過疎の山村にも救命の空の道ができていて様変わりしていた。

車を走らせているとカーブの先に道路いっぱい占拠して、枯れた萱かやの山がゆっくり動いている。思わず速度を緩めよく見ると、こんもりした萱から黒い地下足袋が見え隠れしているではないか。

私の写欲はもう次の行動に移っていた。

道路脇に停車しカメラを持つや萱の山をローアングルで捉え何枚かシャッターを押したあと、小山を追い越して麦わら帽子の顔を見ると八重さんであった。

「やっぱり八重さんだ、重くない？」

声を掛けると八重さんは驚いて萱に押しつぶされそうに息を吐き、それでも笑顔で片手を上げた。声を出すのも辛そうで、離れた場所から歩いてくるのを正面からカメラに収めた。八重さんは

私の好きなモデルさんである。ある時は筍を竈でゆがいていたり、冬日に芋や大根を切り保存食を作っているのに上手く出会うと、姉さん被りの笑顔がレンズにとびこんでくる。私は農作業の手仕事をする人に惹かれて、休日になると季節の移ろいや暮らしを撮り続けている。最近では八重さんもすっかりカメラに慣れ、仕事を続けながら時には笑顔になってありのままの写真が多い。

八重さんは道路下の野菜畑にやつと辿り着いた。萱の山を畔に降ろすとしばらくそれにもたれて仰向き息を継ぎながら汗を拭いた。

「えらいねえ、これは肥料にするの」

「そう、草も生えにくい。けど来年はこんな難儀なことはやめようかと思うゆう」

いつになく弱気だった。子ども達が野菜や米、芋類など里帰りの度美味しいと喜んで持ち帰り、私も行くたびに頂いて帰っていた。

「大方は人にあげて喜んでくれてうれしいわね。今はもう一人になって食べきれんがよ」

「山の野菜は味が違って美味しいのに、おじさん

は？」

「あの人は、あちらへ逝ったわね」

「ええっ、あちらって、まさか！」

私はいっ？　なんで？　立て続けに問うものだから八重さんは困惑しながら、

「暑い最中肺炎になって一か月ほど入院して逝ってしもうたわね。子どもにも話がでちゃんと別れをしてええ往生よ。あの人は最後まで苦勞知らずのままやった。面倒な供養は全部あたしに残して……」

八重さんは麦藁帽子を脱いでぱたと風を入れた。すこし見ぬ間に気のせいかわつれて見えた。家に寄って行つてと坂道を上がり柿の木のある自宅に帰るのをついてゆく。見慣れた池や縁側もそのまま、さきほど八重さんに聞かねばおじさんはひょっこり草刈りから帰りそうな気がする。

昨年の師走だった。おじさんは縁側に腰かけて針仕事をしているではないか。驚いてよく見ると靴下を繕っていた。

「おじさん、縫い物ができるの、器用やね」

私は驚いて大きな声で言った。

「わしは兵隊で衛生班にいたので、隊員の服を縫ったり、毛糸も編めるぞ。ばあさんに頼らいても自分で何でもできる」

「おじさん、すすんでる！」

男性で針仕事をしているのは滋さんを見て知っていたが、おじさんの手慣れた針の運び糸を抜く作業は無駄がない。

ぴんと伸びた眉毛、顔の彫が深くて凛々しく古老の風貌が洩い。縁側に腰かけ障子を背景に針を器用に動かす所作は何の注文もいらぬ。口径二十ミリのレンズで横から正面から、光と影のコントラストをうまく捉え撮影したあと、近くにいた八重さんを縁側に呼び二人並んで記念撮影をしようとした。八重さんはずいぶん照れながらも姉さん被りの手拭いをとって手で髪を整えた。

「まあ美男美女どうして素敵な二人やね、恋愛結婚やろ？ コンテストに出品させてね」

「年寄りがモデルになっても、面白いことないろ

うがね。婚礼いらいじゃね」

二人は同じ集落の知り合いだったらしい。おじさんがふと針の手を休め顔を上げた瞬間を捉えた写真が県の展覧会に入賞し美術館に飾られたのである。

その写真を届けに行った時、八重さんは障子の張替えの準備中で、黄ばんだ障子にホースで水をかけている傍ら、おじさんは池の鯉を見ながらのどかに鎌を研いでいた。

私が精が出ますねと言うと八重さんは、「あたしが座敷から障子を外してきてとたのも、知らん顔よね。鎌などいま研がなくてもいいのに」

八重さんの声が聞こえたかどうか、おじさんはそろりと炊事場に消えてしまった。

「昔から好きなことしかせんのだよ。昼ご飯も一人で食べて、あたしに食べんかとも言わん。いまさう直るはずがないわね」

半ば諦め顔で言い笑っていた。が、私には八重さんが本気で不平を言っているようにも思えな

い。おじさんが食事を終えて出てきたとき、私は持ってきた写真をおじさんに見せて、記念に受け取ってと渡すと、

「こりゃ、本人より男前じゃ」

おじさんは八重さんと呼んで、全紙大の額入り写真をとても気に入って見せていた。

「あの写真が好きで人が来ると自慢で見せていた。急に逝ってしもうて遺影に困っていたら息子が、おやじの好きな写真を使わしてもらえば供養にもなると言うので、林さん、ありがとう。上がって見てやって……」

八重さんは座敷の障子を開けると仏間の座布団を私に勧め線香に火をつけた。

おじさんが私をまっすぐ見て笑っている。あの時の写真だ。無骨で日焼けした肉の薄くなった手に無数の血管が浮き出ている。この手が戦場でも針を持ち綻びを縫いずいぶん役立っただろう。すでに手元から離れた自分の作品がこんな形で遺影となり対面するとは想像もなかった。元気な時のおじさんの笑い声や咳払いまでが障子を通して

日向の温もりそのままに私を包む。

八重さんは遺影に向かって、

「じいさん、林さんが来てくれたわね。男前に撮ってもらうたと自慢しよったろう」

「おじさん！」

焼香しながらそう呼びかけたきり私は胸に迫ってきて両手を合わせ必死に涙を堪えた。おじさんが入院したことも、亡くなっていたことも、こうして再び訪ねなければならず、自分と関わった多くの人達が、いつでも健在で会えると思っていたのに、気付けば歯が抜けるように私の視界から遠ざかっている。

八重さんに挨拶し車に乗った。帰路も遺影が臉から消えず滋さんが心配になってきた。たしか九十歳にはなっているだろう。広場に車を停め滋さんの家の近くまで来ると外の気配で留守だとわかった。窓際のミシンが消えていた。窓から見た壁や土間の板に私がプレゼントした滋さんの写真が一面に額入りで飾ってある。

滋さんは昔洋服の仕立てをしていたが、妻に先

立たれ自分も倒れ、リハビリのため再びミシンを踏み始めたという。多くの人に世話になりその恩返しに四国八十八カ所のお参り袋を縫いはじめたところ、知り合いや近所の人が着物や布地を持って来てくれる。私が滋さんに最初にあったのは、花柄の派手な布地に埋もれて年老いた滋さんがミシンを踏んでいる取り合わせの妙であった。千個以上も作り国分寺で接待をするというので私もついて行った。つぎつぎやってくるお遍路さんが、花柄を吟味しながら貰ってゆくのを滋さんは笑顔いっぱいで見送っていた。その一つひとつは今も巡礼の旅を続けているにちがいない。

家の前の植え込みに赤いバラの花が一輪咲いていた。季節を違えたのだろうか。

留守番なの？ とてもきれいだよ！ 私は健気なバラにそっと触れて声をかけた。

隣人の話では近所の甥がよく面倒を見ていたが町の介護施設に入所したという。

「氷川きよしが好きで、元気な時は大阪にいる娘の招待で、ショーを見たと自慢じゃった。あんた

のあげた写真も、元気な時でいい記念になるねえ。年寄りも減る一方よ」

隣の夫婦も高齢になっていた。私は挨拶しても一度滋さんの家の前まで行きそつと別れを告げた。あの日あの時の滋さんと私とのかかわりは静止画像のまま主がいなくなってもずっと微笑んでいる……

私は帰宅しても、それから数日経っても、無聊な日々は続きカメラを持つ気持ちにはならなかった。

しかし、おじさんが気に入っていたあの一枚が西方の彼方にとともに旅立つ伴侶となったのなら……私はとつおいつ自分に納得させ春には花を持って八重さんを訪ねてみようと思った。

正午の人々

南国市 宮崎 圭 輔

「俺、明日からクラスの人と食べるから、一緒に食うのはこれで最後な。お前もそろそろ、友達作れよ、な」

昼食をとり終えた時、修二しゅうじにそんな事を言われた。修二とは、特別親しかったわけでもないし、友人って訳でもない。ただ、同じ中学から同じ高校に上がった。ただそれだけ。

でもそれは、なかなか重大で大切なパイプだった。

コミュニケーションを取るのが苦手なくせに、一人ぼっちが嫌いだ。理由はいろいろある。学校というコミュニティは異物を許してはくれなくて、知らず知らずのうち、誰にも明言できないようなレッテルを制服の背中へ縫い付けてくる。そ

れがたまらなく怖い。

そう、僕は孤独よりも孤独というあわれみの目が自分を取り囲んでいるのが怖かったのだ。

昼食のひと時など、僕にとってみれば何もない溟海めいかいに放りだされているようなものだった。みんなで寄り集まり、浮力を保っていなければすぐに転覆してしまう危うさを秘めている。

だから、たとえ友達ではなくとも修二と一緒に昼食をとることは、大切な生存戦略だった。しかし、それも今日まで。高校生活が始まって既に三カ月。クラスに話せるような人間はいない。

元来ウダツも上がらなければ、魅力もない僕には、新しい友人を作ることなど至難の業。昼食へ誘う、その輪に入れてもらうことなどとてもじゃないが無理だ。

そんな僕のような人間にも居場所があることを、修二に見限られた次の日に知った。

二〇四号教室。美術室のすぐ隣、空き教室になっっているその場所に、何をするでもなく寄り集まり、言葉もなく、ただ時間が過ぎるのを待って

いる人たちがいるのを見つけた。校舎の最上階にあるこの場所は人通りもない上に、外から見ればみんな仲良く集まって昼食をとっているようにも見える。

正午の人々。

僕はとある小説にちなんで、彼らをそう呼ぶことにした。そして、その日のうちに僕も正午の人々の一人となった。

誤解を恐れずに言うのなら、そこは決して居心地のいい空間ではなかった。集まって身を寄せ合っているだけで、それ以上何かがあるわけではない。

誰しもが、僕と同じように件のレッテルを貼られまいと、避難して来た人々だった。

誰がどの学年で、どのクラスなのか、全くもって分からない。だが、正午の人々にとってはそんなことさほど重要ではなかった。大切なのはこの場やかたまつて、十二時から一時の間、時間が過ぎるのを待つこと。ここで交友関係を広げるなど、何の意味もなかった。

彼らは、どうしようもない自己矛盾とそれに立ち向かうだけの勇気が無い自分を高校生なりに卑下し、現状に納得していた。

彼の存在に気づいたのは、正午の人々となつて一カ月ほどたったころだった。琥珀色の眼鏡をかけたその男子生徒は決まって、掃除用具入れの影になつたスペースで食事をとっていた。さほど大きくはない弁当を食べ終えると、彼はいつも本を読みはじめる。

僕は何かから逃げ出したくなつた時、本を読む。特に休み時間や自習の時間など、読書は孤独を上手にはぐらかす隠れ蓑になつた。彼もそうなのだろうか、最初僕はそんな風に思っていた。

そんなある日、彼の読んでいる本が洋書だと気づいた。指の間から覗くタイトルは上手く読み取れることは出来なかったが、安っぽい紙と簡素な装丁は間違いなく洋書だった。

少し、悔しくなつた。なぜそう思うのかは分からないが、僕も自分で洋書を読んでやろうと、思

い立った。もし、自分が洋書を読んでいれば、彼の方から声をかけて来てくれるかもしれない。そんな算段もあった。

その日の帰り、図書館で洋書を一冊借りた。内容は全く不明。表紙の派手さと、ページの薄さだけで手に取った物だった。

無論。そう簡単に読めるわけがなかった。辞書を手放すことは不可能だったし、単語の意味が分かっても文章の意味が分からないこともあった。しかし、それでも止めなかったのは、自分が洋書を読んでいると件の彼がチラッと一瞥してくれる事があったからだった。

すらすら読めるという程までは行かなかったが、その内に英文の持つているイメージや、雰囲気のような物を掴めるようになって行った。

そして、その頃には僕はもう既に正午の人々ではなくなっていた。

きっかけは、どうしても分からない英文を英語

教師に師事した時のことだった。

そんなに英語が好きなら、英語部に入らないか、そう言われたのだ。

返答に困った。英語が好きなのではない。しかし、部員たちを紹介してやるという教師の言葉はとても魅力的で、現状から抜け出す路が一気に開かれたような感覚になった。

僕はその路を走った。英語部には同級生も幾人かいて、友人となった彼らが、僕の新たな船になつていたので。

最初はぎこちなかったコミュニケーションも英語が何とかしてくれた。慣れない英語で話していると、次の単語を紡ぐことに必死で、妙な駆け引きや猜疑心など入り込む余地がなくなってしまう。相手の伝えたい事を、必死に汲み取ろうとしている内、部員達とも打ち解けてしまっていた。

そして、いつの間にかコミュニケーション、人と話すことが苦痛ではなく、楽しみに変わってしまった。自分がいた。

洋書を読んでいた彼も英語部に誘おうか。そん

な事も思った。しかし、毎日昼食時になるとやってくる部員たちの誘いを断れず、それはずっと後回しになってしまっていた。

英語部に入部して数カ月がたったころ、僕は昼食時に、地元に住んでいる外国人を招いて食事をしようとは提案した。

食事という否が応でもコミュニケーションに引きずり出される場で、ネイティブな人たちと話し合うというのはとても魅力的に思えたし、更なるステージアップが出来るような気がした。部員や顧問も賛成してくれ、段取りは全て順調に進んでいた。

「で、食事会の場所はどうするよ？」

食事会の準備がほぼ整った頃、部長がそう言った。彼の言う通り、食事をする場所が問題だった。部室はあまりにも狭すぎるし、かと言って教室はほぼ全て使用中で、自由にできる場所はない。

「あそこは？ ああ、美術室の隣」

部員の誰かが言った。

「えっと、二〇四号室だっけ」

すぐに誰かが答えると、また他の誰かも続けた。

「でもたしか、あそこの前通った事あるけどいつもお昼食べてる人達いるよ？」

「勝手に使ってるだけでしょ？ どうせ、申請したりしてるわけじゃないし。いいんじゃない？ こっちが正式に使用許可出せば、使えると思うよ」

「いいと思う。あそこ結構広いし、一番上だから眺めもいいしね」

「じゃあ、二〇四で決まりだな。よかったな、場所が見つかった」

部長に言われ、僕は何も言えなかった。部室の窓から、二〇四号室を眺めたが、丁度、イチヨウの木が邪魔で見えることは出来なかった。

そうして、二〇四号教室は食事会の場となった。

目の前で話すネイティブで流暢な英語も聞かず、僕はずっと考えていた。自分が企画し、やりたかったはずの食事会。だが、なぜか心はどこか別の場所にある。あれだけ、多くの人がひしめいていた二〇四号室は今僅か十人足らずの人で満たされている。あの時より、騒がしく雰囲気も和やか。なのに、酷くがらんとしていて、冷たく乾いている気がする。それは、僕が感じている罪悪感が投射されているからだろうか。

窓からは学校の中庭が見下ろせる。噴水とそれを囲むベンチにはカップルが並んで昼食を取りながら笑っていた。

芝生には生徒の集団が輪になって座っている。誰もが、誰かと一緒にいる。一人ぼちはどこにもいない。彼らはいなかった。自分が何処かへ追いやってしまった、どこへ行く当てもない人々。

僕はずっと考えていた。

正午の人々は一体、どこへ行ってしまったのだろうか。

臆病者の誓い

南国市 安藝友 知 史

転職することと愛車を乗り換えること、僕にとってそれらの行為はとても似ていた。その職場で働く、その車に乗り続ける時間が長くなればなるほど、その状況を変化させることに対して臆病になる。もちろん、もつと良い仕事を求めて転職を繰り返す人もいれば、新しい車に乗ることに快感を覚え、頻繁に愛車を変える人もいる。けれど僕はこれまで一度も、その変化を求めることはしなかった。

東京の私立大学を卒業して田舎に帰った僕は、地元の総合病院に就職した。大学で経済学を学んでいたこともあって経理課に配属され、日々の出納業務や経理会計処理などの税務に係る業務に携わった。

その頃、僕にはどうしても欲しいものがあつた。それは、オープンタイプのスポーツカーだ。

「運転に慣れてからにしたら」という両親の反対を押し切り、僕は五年ローンで中古の赤いスポーツカーを購入した。働き始めたばかりの僕には高価すぎる買い物で、安月給のほとんどはローンの支払いやガソリン代に消えた。でも後悔はなかった。大学生のとき、東京の街を颯爽と走る姿を見て、僕は一瞬でその赤いスポーツカーの虜になった。その走りはエレガントで、それでいて力強い。あの車を操ってみたい、その思いをずっと持ち続けていたのだ。

経理課の課長は、寡黙な女性だった。そもそも経理課の仕事自体が寡黙なもので、経理室には常にパソコンのキーボードと電卓を叩く音だけが響いていて、時おり何かの合図みたいに電話の着信音が鳴ったり、誰かがひそひそと話し合う声の欠片が耳に届くだけだった。僕はそんな職場の雰囲気が好きだった。学生時代から人とのコミュニケーションが苦手だったから、誰かと会話するストレスを感じることなく目の前の仕事だけに集中できる環境は居心地が良かった。たまに仕事でミ

スしても、課長は静かに「次は気をつけてね」と注意するだけだった。課のほとんどが、そういう静かな優しい人ばかりだった。

休日には朝からスポーツカーに乗ってドライブに出かけた。天気が良い日は幌の屋根を開けて運転を楽しんだ。東京のように洒落た街並みを駆け抜けることはできないけれど、田舎には田舎の良さがある。海岸線を走れば海の風を感じることができるし、山道を走れば、森の香りを嗅ぐことができる。気がつくといぶん遠くまで走っていて、帰りが夜になることも度々あった。

働き始めて二年後、楠瀬美晴という新卒の女性が経理課に配属された。丸くて細いフレームの眼鏡をかけた、大人しそうな女性だった。僕が楠瀬美晴と初めて話をしたのは、一週間後に行われた新人歓迎会だった。

「赤いスポーツカーに乗ってるんですか？」

誰かから聞いたらしく、彼女のほうからそう声をかけてきた。スマートフォンに収めた愛車の写真を見せると、彼女は目を輝かせながらそれを覗

き込んだ。そしてその後、僕の車について色々な質問をした。大人しそうな彼女は、意外にも車にとっても興味を持っていた。女性と話すことに慣れていない僕だったが、愛車のことになるかと饒舌になった。僕たち二人は歓迎会が終わるまで、車の話で盛り上がった。

「助手席に乗ってみる？」

それは、人生で初めて口にする台詞だった。

次の休日、赤いスポーツカーに初めて人を乗せた。屋根をオープンにした状態で風を感じながら、助手席の楠瀬美晴は職場では見せたことのない笑顔を見せた。その可愛らしい笑顔は、僕の胸に温かな熱を感じさせた。

それから僕たち二人は、休みの度にドライブに出かけるようになった。彼女と色んな場所に行った。廃校を改修して造られた水族館。大きなウミガメを見た彼女は歓声を上げた。別の日には、狭い道が続く山道の中腹にあるお寺にも行った。境内から見える太平洋を眺めたあと、並んでお参りをした。隣の彼女は何を願っているのだろう。

僕は、楠瀬美晴に恋をしていた。助手席はもう彼女専用のもとなっていた。雨の日の夕暮れ、僕たちを乗せたスポーツカーは山道を上り、山頂の駐車場に着いた。眼下の街の明かりが灯り始めている。僕はラジオのスイッチを切る。雨が幌に当たる音が、車内に小さく響いている。僕はこの音が好きだ。どんな音楽よりも美しく、情緒的だから。僕たちは言葉を発しないうまま、しばらくその音に耳を傾けた。そして、初めてのキスをした。それから三年の交際を経て、僕たちは結婚をした。プロポーズしたのも、やはり赤いスポーツカーの中だった。これからもずっとこの幸せな日々が続けばいい、そのとき僕はそう願ったのだけれど……。

結婚後、僕は経理課から施設管理課へと異動になった。夫婦が共に同じ部署では働かないというのが、この病院での昔からの習わしだそう。妻は心配していた。施設管理課の噂を知っていたから。もちろん僕も知っている。病院内でも、職員の高離職率が飛びぬけて高い部署だということを。

施設管理課の男性課長は良く言えば体育会系、悪く言えばパワーハラスメントの常習者だった。施設管理課は病院内設備の維持管理を行う部署だ。新卒職員が立て続けに辞め、その穴埋めに僕が回された訳だ。設備の故障や修理の依頼があれば自分で直せるものは直し、無理なものは業者を手配しろと課長から教わった。けれど電気工事や水道修理の知識など持ち合わせていない僕は、ほとんどの修理について業者を手配するほか無かった。業者を呼び現場確認し、修理見積りを取る。そしてその見積りを持つて課長に修繕の伺いを立てると、大声で怒鳴られた。

「どうして相みつを取らない！」

複数の業者から相見積りを取るなんてことも、怒鳴られるまで知らなかった。

「できるだけ安い業者を探すのが、お前の仕事だろう！」

僕は別の業者から見積書を取った。業者との折衝なんて今までやったこともない僕にとって、相見積りを取ることにすら苦痛だった。そして、その

見積書を持って課長の元に行くとまた怒鳴られた。

「なぜ三社目を取らない！」

きつと三社目を取れば四社目を、と言われるの
だろう。僕が何をやっても、課長はそれに難癖を
つけた。

「大丈夫？」

夕食時、箸が進まない僕を心配して妻が声をか
けた。最近ぼんやりしていることが多いわよ、と
言われた。そして妻は思い出したように言った。

「そういえば先輩に聞いたんだけど、施設管理課
の課長って、うちの課長のことを好きになって告
白したことがあるんだって。でも無下に断られて
しまつて、それ以来経理課を目の敵にしてるらし
いの」

だから、経理課から来た僕も目の敵にされてい
るのだろうか。きつとそうだ。

それから、些細なミスを取り上げては他の職
員の前で怒鳴られる日々が続いた。その度に僕の
心には靄が広がって、やがてそれは深い霧となつ

た。職場では常に緊張し、家に帰ると何もする気
が起きなくなつた。

「いつか、経理課に戻れるよう頼んでみる」

異動になつたとき、経理課の課長はそう言つて
くれた。難しいことだと分かっていたが、今の僕
にとつてその言葉が一縷の望みであり、施設管理
課で頑張り続ける理由だつた。

「今度の休み、久しぶりにドライブに出かけな
い？」

そんな僕を見かねて、妻から誘つてきた。そう
いえば、もうしばらくハンドルを握っていない。

休日、僕たちは久しぶりに赤いスポーツカーに
乗って出かけた。風を感じながら運転すると、心
の霧が少しだけ晴れた。妻よりも長く一緒にいる
相棒は相変わらず心地よく走ってくれたが、ギア
の変速時にいつもとは違う違和感を覚えた。その
ときは、さして気にも留めなかつたのだけれど。
妻の希望で、僕がプロポーズをした場所に行つ
た。あの日は僕が妻を驚かせただけけれど、今日
はその逆だつた。

「赤ちゃんができたみたい」

もちろん嬉しかった。でも、父親になるという実感が心の奥の不安を炙り出す。仕事のことで。毎日職場に行くのが苦痛だった。

「そんなに辛いなら、辞めれば？」

僕の心を見透かしたように、妻が言った。

「でも、子どもが生まれたらお金もあるし」

「仕事なんていくらでもあるわよ。それよりも、家族の前では笑顔でいてほしいの」

僕は、妻の前でさえ笑顔を作れてなかった。

その帰り道、走行中に車のギアが入らなくなった。トランスミッションの故障で制御不能となった車は、電柱にぶつかる寸前で何とか止まった。心臓が激しく動く。隣を見ると、妻が両手でお腹を守っていた。それは母として、無意識に取った行動だった。それを見た瞬間、僕は決心した。

仕事を変えよう。

いつか経理課に戻るんじゃないか、そんな淡い期待を持ちながら働き続けるうち、僕の心は赤いスポーツカーと同じように壊れていった。制御

不能になる前に、修理しなければならない。

思い出の詰まった愛車を手放すなんて、考えたこともなかった。でも、この車にはベビーカーを乗せるスペースも十分にはない。

妻と生まれてくる子どものために、ファミリーカーに乗り換えよう。

僕にとって、転職することと愛車を乗り換えることは似ている。どちらも、愛する家族のために行うことだ。父親として、君たちを幸せにすると誓おう。

虎杖の花^{いたどり}

高岡郡佐川町 柳瀬川 ひろし

いつのことだったろうか。

まだ父も母も元気だった頃、庭の隅に虎杖の株を植えた。

山で見つけた太くて肉厚の株を、植えてみようかと父が言い、掘ってきたものだ。

毎年、何本か立派な虎杖をいただき、最後は取らずに残して葉を繁らせた。庭の隅とはいえ邪魔になるので切ってしまうかと思っても、来年はもっと太く大きくなるぞという父の一声で、邪魔になる葉だけを切られて、育てられてきた。

やがて、この虎杖が、我が家のカニかご漁の「標準木」とされるようになった。

「虎杖の花が咲いたぞね」

母が待ってましたと言わんばかりに、父に告げ、父はそっけない返事を返しながらも、すでに物置

からカニかごは出され、しっかりと手入れをされているのだった。

今年も、虎杖の花が咲き始めたが、母がそのことを父に告げることはすでになくなっていた。父は八年前に他界し、今では佳孝おじさんがときどきカニを届けてくれるだけになっていた。

母は、叔父さんが届けてくれるカニを本当に喜んで食べた。

「お父ちゃんに食べさせちゃりたいねえ」

母は、買い物や調理が自分でできる間は、カニは私がゆでると言ってきかなかった。火のついたなべのそばで、じっと三十分座り、独り言を言っていた。それはおそらくカニをきつかけにして、亡くなった父に語りかける大切なひとときだったのだらうと思う。

車椅子で外に連れ出した母に、虎杖の花が咲いたねと促しても、母にはその花がいたいどう映っているのか確かめようがない。

母は、しばらく花を眺めた後、手を伸ばし花を掴もうとした。私は、車椅子を後ろに引き、母と花とを遠ざけたのだが、果たしてそれが良かったのかどうか、私にも分からない。

私は、虎杖の花から、次に真つ赤な彼岸花の群生する野原に車いすを進めた。彼岸花に近付くと母は身を乗り出して彼岸花を捕えようとした。車椅子はまだ彼岸花の手前だったので、母の手は宙を漂い、宙を掴み、やり場のない苛立ちを感じているようだった。

「裕樹、行くぞ」

父が珍しく私を川に誘った。

カニかご漁の始まりの日だったのと、ちょうど日曜日だったこともあり声をかけてくれたのだと思う。

私は、収穫前の田んぼが気になっていたもので、川行きは断った。穂が始めイノシシが田に入る前に、ネットを張っておきたかったのだ。

父は、アユも捕ってくるぞと言い、新調したばかりの川靴を履いて出かけて行つた。

庭の虎杖の花は、その年、特に見事に咲いた。虎杖の花が見事だとカニ漁が豊漁なのかといえば、あまり関係はなさそうだ。今となっては、虎杖の花が見事だった年として強く心に残っている。

その日の夕方になつても父は戻らなかった。どんなに遅くなつても真つ暗になる前には帰ってくるのが習慣だった。

午後八時を過ぎたところから、なんか変だねということになり、母を連れて父がよく行く川に向かった。

途中、父の車とすれ違うのではないかと思い、対向車にばかり目を奪われ運転がおろそかになっていた。母は、今のは違うかねと何度もすれ違った車を振り返り、それでいて確信は持てずに助手席で小さくなっていた。

川に着くと、暗闇でもすぐに父の車は見付かった。

体調を崩して車で休んでいることを期待していた私は、中をのぞき込んで足の力が抜けていくのを感じた。

母にはそんな様子を悟られてはいけなくて、河原を見てくるから車で待つようにと言って、川音のする方に進んだ。河原で体調を崩すか、思わぬ怪我をして動けないでいる父を発見しようと懐中電灯の光の中に父の姿を探したが、カゲロウが視界を横切るだけだった。

水際に父のクーラーボックスがボツンと置かれていた。

カニかごとと思い、父のつけそうな場所にサングルのまま入っていった。

かごは川底をならした比較的浅い場所に、父の性格を物語るようにきちんと置かれ、流されないように近くの猫柳の根元にしっかりと結び付けられていた。

私は、川面にも光を当てて父を探してみた。川の水量は、増水後一週間ほど経っていたので、かなり平常に戻りつつあったが、流れに立ちこんで

アユを釣るには、用心しないといけないくらいの状態だった。

水は澄んでいたもので、川底はよく見えていた。カニかごの先の方に赤っぽい何かが見えたので、私は、その場所まで入っていった。深さは私の膝あたりだが、流れに勢いがあるため、まくり上げた私のズボンは腰のあたりまで濡れてしまった。

手をつたみ肩まで濡らしながら拾い上げてみると小さな赤いはさみだった。直径三センチほどの黒くて丸いものとつながっている。変なはさみだなと思いつながら、はさみをひっくり返したり、丸いものが磁石ではないかと確かめたりしている。不意にはさみが黒いものとワイヤーで結ばれていて、伸びることが分かった。黒いものにクリップのようなものがついていたのは、そういう使い方をするのだと合点がいった。

そのとき、突然思い出した。

父が、いいだろうと言って、こんなはさみを見せてくれたことがあったなと。

アユ釣りをしてしているとよく川の中で、仕掛けを

直すことがあるらしい。岸に戻るのは時間の無駄なので、そのまま川の中で直すのだが、その時このはさがとても便利なのだ。うっかり川に落とすことがないし、もし、手から零れ落ちたとしても、巻取り式の細いワイヤーでつながっているので安心だ。

私は、父の身に起きたことをほぼ確信し、それでいてそうであってほしくないという感情のままに、携帯電話で警察に連絡をしていた。

いったん車に戻り、父が見付からないことを母に告げ、もう少し探してくるから、車で待つようにと言って、周辺を歩くことにした。

懐中電灯で照らし出された河原は延々と続くわけではないが、白々と映し出される河原の石ころが、ピクリとも動かず、飛び交うカゲロウの向こうでじっと沈黙を守っているように見えた。

川岸では、虎杖の花が同じく白く映し出され、ときどき夜風にそよぐ様が、そこに父をかくまっているのではないかという期待感を抱かせるのだった。

警察や消防の人たちがやってきてからのことはあまり覚えてはいない。私も探すという母をなだめ、父が帰っているかもしれないからと家に連れ帰ることに力を注いだ。

帰り着いても高ぶった気持ちを抑えることはできなかったが、母を気遣うことでなんとか自分自身を保つことができた。

翌日は八時三十分から捜索を開始するという話だったので、とにかくその時間を待った。母は眠れないようにソファに座ったきり、身動き一つしなかった。

長い長い夜だった。

その夜がどのようにして明けたのか私には未だに分からない。

捜索隊とともに二日を過ごし、三日目の朝、五キロ下流で父らしい遺体が上がったと連絡があった。

母は、父がかわいそうだからと、早く見付かる

ことを願っているようだった。

私は見付かつてほしい反面、いつまでも見付からず、どこかで生きているかもしれないという幻想を抱かせてほしいとも思っていた。

着ていた服の特徴などからほぼ間違いないと伝えられたものの、私たちは検死が終わるまでに、これからのことを考えるだけの長い時間をいただき、父と対面することになった。

もう何度、この季節を見送ったことだろう。この頃は、やっと父が通った川で漁をすることができようになった。

母は、川を恨んではいけないと言い続け、秋になるとカニを父の仏壇に供えていた。

そして、今、車椅子に乗った母は彼岸花に手を伸ばし続けている。

私は、車椅子を彼岸花に近付ける。

母は彼岸花を強く掴んだ後、力を緩め、優しく包み込むようにした。花を引きちぎるわけでもなく、包み込んだまま見ていた。

「食べないでよ」

私は、言わなくてもいいようなことを言っしまい、視線を上げた。

彼岸花の群生の後ろには、虎杖の花が静かに佇んでいた。

詩

顔

高知市 田村 乙女

就職試験の最後はこれだった
—顔をテーマに800字以内で述べよ—
二十歳の私はこう書いた

「女性美しく生まれただけで
幸せの半分を手に入れている
あとの半分は努力と経験だ
しかしそうでない者は全部が努力と経験だ
これは実に不公平である
が、悲観することはない
目いっぱい努力と経験は大きな力となる

目を開き

耳をすませ

アンテナを張り

知識と見識を蓄積して道を切り拓くのだ
それは自信となり必ずや顔に表れる
半分の努力と経験では作り得ない顔だ」

あの日から四十二年

私はいまどんな顔をしているだろう

目はかすんでいるが

善悪を見極める力は残っているだろうか

唇は渴いているが

まだ自由を叫べるだろうか

頬はたるんでいるが

純情の欠片は残っているだろうか

ある時は偽善に歪み

ある時は作り笑いを浮かべ

ある時は嫌なものから目を背けて来た

私はいまどんな顔をしているだろう

椅子の存在

高知市
都 築 悦 子

液晶画面を見つめる学生
黙して坐っている老人
帰りの遅いママを待っていると
言う幼い人
人がひととき休んでは
自分の場にもどって行く
たくさんのものを載せた公園の椅子
ささくれて浮きあがった木目が
泣いているようにも
笑っているようにも見える

朝がきたのか夜が更けたのか
ここに来てどれ位いの時が過ぎたのか
窓の外で咲き継ぐ花も
くりかえされる世情も意識の外
安息の場なのか
表わさない哀しみの潜む場だろうか
食こぼしや時に失禁の染みを乗せ
椅子はそこにある
笑顔で坐る母がいる

乱暴で怒りっぽい木目
感情をのみ込む無表情の足
慈悲に満ちた背もたれ
だらしなくもたれかかると
寄りかからずにと押してくる
さまざまな椅子に出会う日々
深められない思考に
時には背もたれに棘ものばせる
いつまでも
おさまり悪くきしみ続けている
私と言う椅子

孤独の風景

私の孤独は私がまだ少年の頃のある風景と
いつも繋がっているようです。

私の生家は大きな河の近くにあるのですが
当然、幼い私や私の友達の遊び場は決まって
この河の河原や堤防でした。

堤防は小学校への通学路にもなっていました
たから下校になると、泳げる季節は魚や虫を
取って遊び、寒い季節は皆がそれぞれに木切
れや竹の棒を持って円陣を作り、野焼きをし
たりするのです。火が予想以上に広がろう
ものなら、頬を真っ赤にして叩き消すのに大

四万十市

小笠原

毅

わらわとなるのです。

やがて、あたりが暗くなり、一人帰り二人帰り、あるいは母親が連れにきて。しかし、その幽かになった火に未練のある私はいつまでもその場所に蹲って枯草や木の燃えるさまを見続けているのです。

遠くの家々にはすでに灯がともり、いつの間にか風は夜の冷たい首筋を撫でる風に変わっています。私は一人歌を歌ったり火をかき回したりして火が完全に消えるまで家に帰らない子供のようでした。

そして、火が消えると突然に、それまでの未練もかき消えてやっと家路に向かうのです。堤防には私の背丈ほどの雑草が生え、手足には薄暗い闇が絡みつき、不安と寂しさに急かされるように、暗い海のような闇の中を家のある方向へ帰るのです。

私は都会生活を送り始めて数年になります。が、今でも、繁華街の雑踏の中、暴力的に点

滅するネオン、大勢の人達が蠢くのを見るにつけ、そこに蒼ざめるほどの寂寥感の中に一人佇む私を見つけるのです。

こんな時、私はあの一つの風景、丈高い雑草に覆われた堤防、暗い海のように流れる闇の中を一人、家路に向かい歩き続ける感覚に捉われるのです。

ありがとう

高知市 前田 高 昌

たいようさんさん ありがとう

僕の服を乾かしてくれて ありがとう

お父さんさん ありがとう

僕を育ててくれて ありがとう

お母さんさん ありがとう

僕を産んでくれて ありがとう

お月さんさん ありがとう

さみしい僕を 悲しい僕を

死にたくなつた僕を

いつも見守ってくれてありがとう

お母さんさん ありがとう

僕が赤ちゃんの時 死んじゃったけど
お月さんになって 僕を守ってくれて
お母さんさん いつもありがとう

お父さんさん ありがとう

お母さんとお月さんの秘密

教えてくれて ありがとう

お父さんさん ありがとう

ありがとうって いつも言ったら

幸せになれるって 教えてくれて

お父さんさん お父さんさん

いつもいつも ありがとう

望月ノ光

土佐郡土佐町

矢

野

ゆかり

あぁなんてまろい光だ

望月だ

太陽のような澁刺さはなく

幼子の手のように柔らかな光

あぁ望月だ

黄金の清しい光が明かす

足元の朧な我が影に

深くため息をつき

自分の心を照らそうと試みる

顔を上げて望む月

ぬばたまなる心に届く一条の光

「今の私にはこれで充分」

ため息が漏れる

強い光には怯えてしまう

冴えた光には凍えてしまう

まろい光に

少しづつ心を開く

月下美人のように

疲れきり傷ついた

心に望月の光をあて

明日の平穏を祈り

眠る

望月だけが知る私

人間

南国市 田中 どりー

かつて私は泥だった。

腐った水のようなにおいをさせ、膿のよう
に粘着質な、汚い泥の塊だった。

私の傍には、いきものが嫌うなにもかもが
置いてゆかれた。

私はそれを食べて育った。

嘘を食べ、それに付着した虚栄心を食べ、
優しさに似た何かを食べ、悲しみに似た何か
を食べた。

全ては人間が排泄しては再び肚に溜めるも
のだった。

純粹さを演じる幼稚を食べた。白濁の精を、

流された経血を飲んだ。

老いさえも口にした。

男を食べた。女を食べた。干からび始めた赤ん坊の腐乱死体を丸ごと一匹たிரáげた。

やがて浜辺に打ち上げられた私は太陽を見た、そして雨水を浴びた。

泥であつたはずの私は、いつの間にか肌色になつていた。

驚き、波紋に映る自身を覗いた。

そこにいるのは、人間だつた。

私は、人間になつたのだ。

その様子は空からカラスに、波打ち際から蛇に、木の上からカエルに追われていた。

三者は一樣に薄汚いものを見る目で、しかし、人間になつた私を嘆き、やがて哀しみ、最後は嘲笑を浮かべるに至つた。

私は、人間になつたのだ。

紅葉の手

土佐市
石川志津

紅葉もみじの様な 幼き手
慈しみと躑に火照つては
冒険と探索に明け暮れて
陽の道に影を映し弾ませ
夕方のサイレンに背を押された

青葉に変わった 思春の手
過ちを正されては恥を紡ぐ
思いのままに
熱く冷めてを繰り返し
水を弾く手の甲で

何度も涙を拭っては
湿った頬を枕に沈ませた

眼に映る：：世相の波：：
抗えず 麻痺しながら
その時 その時 適応する為
手は自身に 手を掛けた：：

紅葉こうようを控えた 私の手
酸いも甘いも痛みも 熟し
四季の風を日々つかむ

恥を拭って
脱ぎ捨てても
私は私 そのまんま

いつか 新たな紅葉の手：：
愛しく包む夢を視ながら
洗濯物のシワ伸ばし
カラッと晴れた空に干す

ガイド

高知市
大野仁志

白い杖が空気を混ぜている
先の赤い盲人用の杖
駅の階段の段差を丁寧に確認している

近くにおかぶかの靴下を履いた少女が二人
その様子を見ていた
その人の陰口でも言っているかのように
ヒソヒソと小声で二人
話し合っているかと思うと
その人の傍に寄って行った

どうやら誘導してあげるらしい

近くにいたサラリーマン風の男が
それをじっと見ていた

少女らは照れながら笑顔で話しかけている

その後、電車の中で

感心する光景だったと思い出していたが

すぐに感心してはいけな**い**と思つた

これが当たり前の事であると

思わなければいけ**な**い

吊広告の

水着姿の少女を見ながら考えた

日ごとの願い

土佐市 奥村真眉

不思議としか思えない
毎晩、同じ時間に起きる恐怖……

独りの夕食の膳を

やっと片付けて

テレビに気をまぎらしたあと

和箆笥の上の夫の遺影を暫らく見つめる

痩せた身体をベットに横たえ

蓑虫となり眠気を待つ

ふっと息苦しくなつて目が覚める

今夜も時計は やっぱり4時を指している

胸をすぼめてさすりながら

枕もとの薬をまさぐる

外はもう濃い闇が僅かに薄れかけて
天体はいま、夜明けの準備で
山も海もひれ伏すほどの
エネルギーを燃やしているに違いない
朝々、その壮大な営みが
わたしの体を微妙な周波で襲い
酸素の道を断ってしまおうとするのか

90年永らえながら
心の芯に染みこんでいる
かずかずの しがらみ
思いっきり吠えたことは一度もなく
つくり笑顔に倦きた臓器たちは
錆びついてしまったのか

早朝の真新しい陽光の中に
かくされた午前4時の恐ろしい周波に
日々の暮しを台無しにされるのか
今夜は身構える心の剣を捨てて
ゆったりと 寝てみよう

日雇いの歌

高知市
伊藤美砂

ドヤの二階で産声を上げた
行きずり女の誰とも知らぬ種
外の便所で産声を上げた
疳虫女の意地で産み落した種

親父の話は季節ごとに変わったが
おれはといえども信じちゃいない
免許を売って口座を売った
名前を捨てて仏壇棄てた
いつかの親父と同じ背をしてるだろう
解体現場の土埃の中で

ホラだとわかっていても
囲い屋の台詞よりや耳触りがよかったな
冗談めかした親父の顔も
弾き語りの野蛮な歌詞も
いまだにハッキリ覚えてる

場末の飲み屋で産声を上げた
ソープで四月に産声を上げた
空き屋の縁側で産声を上げた
ジャズ喫茶の向かいで産声を上げた

一期一会

高知市 千里日月

茶人が陣内に入ったのは

日が落ちて半刻ばかりしてからだった

大将自ら茶人を迎え

野点の席を設えたところに案内した

明日の生死を賭けた戦の前に

是非ともお願い

天下第一との評判のその茶人を招いたのだ

茶人は炭の火を整え

持参した竹筒の水を釜に入れた

時折 松明が弾ける音が響く

茶人の流れる所作の影が揺らめく

帛紗を丁寧にはどき

中の茶碗に一礼して拭った

茶匙で茶を入れ 釜の湯を注ぐ

茶筌を持った手が滑らかな円を描く

茶が点てられ武将の前に置かれた

武将は目を大きく開き

じっと茶碗を眺め

茶を口にすると目を瞑った

最後の一滴を啜ると

茶碗の底を確認し頷いた

御母堂からお借りしました

茶人の言葉に武将は大きく頷いた

亡き父の愛した茶碗

己が出生時の産湯に使った井戸水

それを母上が汲んで下さったという

心残すことなく戦いに臨んでまいります

大將は茶人に深々と頭を垂れた

ご武運を祈ります

茶人もまた武人に深々とお辞儀をした

短

歌

高知県文芸賞一首

野戦病院を君は知らじな易易と口にするまじコロナと言えど

高知市 多田眞理子

高知県文芸奨励賞五首

窓側の気持ちいい席ちやくちやくと日焼けしていく私の右腕

高知大学教育学部附属中学校二年 中屋優菜

コロナ禍に有期雇用で失職し職安急ぐ子の背に若葉

高知市 梶原和歌

チューリップ家族そろってならんで私の家族のように

土佐市立高岡第一小学校六年

藤田あかり

穂を孕む稲田吹く風ふところに朝露著き畦草を刈る

香美市

公文正子

核禁止条約なげに署名せぬ世界にひとつの被爆国日本

高岡郡中土佐町

川渕湧三

佳作五首

始発から終点までのバスに乗り海の見ゆればネクタイ外す

土佐清水市

山

下

昭

文

ありがとう蒼き世界にママの名を胸に貼られてみどり児眠る

高岡郡佐川町

うちだ

ゆ

み

久しぶり外出できたその理由はワクチン接種一回目だけ

清和女子中学校二年

佐

野

美

麗

いわし雲わた雲こめ雲かみなり雲「ん？こめ雲？」お腹が空いた

高知大学教育学部附属中学校二年

山 本 莉 緒

ガラス越しの面会時間十五分マスクを外し義母に手を振る

土佐市 池 田 育 子

俳

句

高知県文芸賞一句

受験期の子は深海の魚となる

南国市

中

村

竹

子

高知県文芸奨励賞五句

柿の木は残すやうにと生身魂

室戸市

山

本

千

秋

宿題が終わらないよと泣く風鈴

高知県立高知南中学校三年

植

木

穂

花

出征の兄は十七木の実降る

高知市

浜

田

節

鷹渡るをりをり高き礁波

高知市

大

窪

雅

子

花びらは日のすべり台福寿草

高知市

島

崎

有

造

佳作十一句

暁^{あかつき}の闇の深さへ蟬生まる

高知市

古

田

彩

香

スイスイスイにんじやみたいなあめんぼう

土佐市立高岡第一小学校六年

岡

田

璃

奏

春風が背中をボンと新学期

土佐市立高岡第一小学校六年

中

脇

柚

羽

蜻蛉の眼に盧遮那仏盧遮那仏

高知市
千里日
月

一筋のけもの道より秋の風

須崎市
柴口
美紀

蓮開く音のけはひや考^ちの息

安芸市
山崎
葉

祝ぎごとと言ふでもなくて栗の飯

香南市

乾

真紀子

応援で友と思いを紡ぐ夏

高知市立春野中学校三年

太

田

永吉

病葉の葉のページ読み返す

高岡郡四万十町

中

森

鶴子

又一人離農の草を刈つてをり

高知市

西

込

と

き

土佐湾の長汀光る良夜かな

高知市

栗

坂

海

馬

川

柳

高知県文芸賞一句

シニアカー少年兵は美しい

高知市

大

野

充

彦

高知県文芸奨励賞五句

飽食の国に生まれて火の匂い

高知市

吉

尾

光

生

枝豆や低い目線のままで行く

南国市

井

上

志

津

立ち枯れの父を私は笑わない

香美市

森

本

幸

美

鉛筆と同じ私はB^ビの芯

高知市

富士田

三

郎

ひまわりはおひさまでるとみなきりつ

土佐市立高岡第一小学校五年

森

口

咲

空

佳作十句

トゲひとつ抜きたい午後の五月闇

吾川郡いの町

岡

林

裕

子

常道^{じょうどう}をはみだしてからひかりだす

高知市

古

田

彩

香

ほどほどに五欲の虫を飼いならす

高知市

渡

辺

俱

康

人は皆漂流物として生きる

高知市

北

川

鉄

男

逢いたくて少女は獺を飼ひ馴らす

南国市

山

崎

光

子

大河にはまだまだ遠い森の中

南国市

垣

内

の

ぶ

さびたねじ水をかけてもかたいまま

高知県立日高特別支援学校高知みかつき分校高等部一年

大坂祐冴

冬の風そつちじゃないと声がする

土佐市立高岡第一小学校六年

門田彩愛

夜の海月をぬすんだ大どろぼう

土佐市立高岡第一小学校五年

松本征慈

ぬ
か
づ
け
の
中
に
野
菜
も
0
点
も

高知県立高知南中学校三年

伊
勢
本

志

音

審 查 評

短編小説審査評

今年の応募数は三十八編。十二歳から九十歳まで、幅広い年齢層からの応募があった。審査終了後に作者の年齢がわかる仕組みとなっているが、年齢に応じた作品の違いがわかって面白かった。年齢によってテーマの描かれ方は違っていても、読者の琴線に触れるものがあるかないか、それだけである。作者は行間にその情感をにじませてほしい。

審査の結果、次の四編を入賞とした。

文芸賞「遺影」

カメラが趣味の私は、以前おとずれたことがある山間の集落に出かけ、モデルとなってくれた男性が亡くなっていることや、介護施設に入所していることなどを知る。当時撮影した写真は遺影に使われ、住人のいない壁に飾られてあった。人生の一期一会、それが一枚の写真のなかに閉じ込められている。写真を介した人との出会いをうまく捉えている。

文芸奨励賞「正午の人々」

コミュニケーション力のない僕は、正午の人々が集まる部屋を利用している。その部屋は昼食をひとりできるとしかない高校生の避難場所だった。あるきっかけでその部屋を出ることになった僕は、クラブの催事でその部屋を使用す

ることになる。淡々とした筆致で高校生の実態を描いている。文章もしっかりとして、内面の揺れがうまく捉えられている。

文芸奨励賞「臆病者の誓い」

転職することと愛車を乗り換えることはとても似ている、その言葉が書き出しと最後にあって、そのあいだに描かれているストーリーでその意味がわかる、という仕掛けとなっている。サラリーマンの悲哀をうまく描いているが、主人公の甘さが気になる、という指摘もあった。

佳作「虎杖の花」

父親が庭に植えた虎杖がカニかご漁の標準木となった。父親はひとりでカニかご漁に出かけて水死する。その後、母親を車椅子に乗せて散策しているとき、母親が手に包んでながめていた彼岸花の後ろで虎杖の花がひっそりと咲いていた。静かな作品である。内容に派手さはないが、読後感がいい。

その他、「パートナー」（内山真知子）、「ファン・レター 真冬の謎の来訪者」（カール・ウオーターガーデン）、「見送り」（出海博史）、「寛いだ」（大谷豊）、「病院物語」悟りの外来編」（齋）、「虚象」（茶と文）なども議論の対象となった。

（審査員——杉本雅史、米沢朝子、文責・若江克己）

詩審査評

応募総数は五十編。文芸賞一編。奨励賞、佳作、それぞれ五編。いろいろ込み入った書き方をして何が言いたいのか分かりにくい作品も多かったが、やはり詩であるかぎり、いま、ここにおける作者の真情をまっすぐに表現したものでありたい。

文芸賞、田村乙女「顔」。まず就職試験の課題に應える形で顔の一般論を述べる。顔は努力と経験によつて変化していく、と。次に今の自分の顔についていろいろな場面を振り返る。そして最後にもう一度、「私はいまどんな顔をしているだろう」と、念を押すような一行を付け加えて作品を結ぶ。この組み立て方が良かった。顔は固定したものではなく、日々新しく展開されていく。顔を問うことは、自分の生き方、自分のいまの心構えを問うことでもある。

奨励賞、都築悦子「椅子の存在」。通りすがりの人たちが休んでは去っていく公園の椅子、ささくれだつて、泣いているようにも笑っているようにも見える。部屋の中에서도年老いた母が坐る椅子、安息の場なのか哀しみの場なのか――。さまざまな椅子に出会い、そこに怒りつばさや無表情や慈悲や、あるいは逆に棘さえものばせている。

これは、「いつまでも／おさまり悪くきしみ続けている／私と言う椅子」ではないかという、気付き。

小笠原毅「孤独の風景」。言葉の使い方がしつかりしている。ネオンの点滅する都会での暮しの中に、ふと遠い幼少時のある夕暮れの孤独と寂寥感をよみがえらせる。リアリティーのある作品に仕上がっている。

前田高昌「ありがとう」。一見、子どもが書いた稚拙な作品のようだがそうではない。よく読んでみるとあちこちにあたたかい歌があり、平凡な表現のようにみえて謎が隠されている。

矢野ゆかり「望月ノ光」。やまとことば「もちづき」、そのまろやかで柔らかな感触の光の中に自分を置き、心の充足を得ようとする。「月下美人」という言葉もほほえましい、自己肯定の詩である。

田中ピリー「人間」。批評精神を込めた強い印象を残す詩。腐海の泥であった「私」がやがて肌色になり、「人間」になっていく。罪や不条理を背負いながらも、「私は、人間になったのだ」という繰り返しに、一すじの可能性としての存在を見ることができよう。

佳作も含め、今回は結果的に多種多様な作品を選ぶことになった。

(審査員——小松弘愛、長尾軫、文責・林嗣夫)

短歌審査評

今年は二七四名から四六七首の応募があり、昨年より多く、年齢的には最高齢が一〇一歳、最年少が一一歳であった。学校からは、高知大学教育学部附属中学校、春野中学校、清和女子中学校、南海中学校、高岡第一小学校から沢山の応募をいただいた。先生方のご支援に感謝申し上げます。一般の部は、昨年同様、優秀作品の多い中での選考であった。

文芸賞

野戦病院を君は知らじな易易と口にするまじコロナと言えど

多田 眞理子

コロナ感染拡大により病床逼迫のつづくなか、国の重職にある人が「野戦病院」という言葉を使う。野戦病院とは、戦の背後にあつて傷病者を収容又は治療のため設けられたもので、現在の病院事情とは大きく違う。作者は比喩としても使つてはしくない。「コロナと言えど」と結んでいる。文芸奨励賞

窓側の気持ちいい席ちやくちやくと日焼けしていく

私の右腕

中屋 優菜

作者は、中学二年一四歳、気持ちいい席でちやくちやくと日焼けしていくと言う。擬音語が明るい。結句の「私の右腕」の具体的表現が一首をよくまとめている。

コロナ禍に有期雇用で失職し職安急ぐ子の背に若葉

コロナ禍令和三年の世相を詠みこんでいる。この一首に惹かれたのは結句の「子の背に若葉」である。短歌が湿っぽくならず好感。

チューリップ家族そろつてならんでるまるで私の

家族のように

藤田 あかり

作者は小学六年一一歳、チューリップは球根植物で、植えたところに芽を出し花が咲く。まるで私の家族のようだと見たままを素直に詠んでいる。幸せなご家族が想像されます。

穂を孕む稲田吹く風ふところに朝露著き畦草を刈る

公文 正子

農家の女性の日常をさりげなく詠まれ豊かな気持ちのよい一首である。

核禁止条約なぜに署名せぬ世界にひとつの被爆国日本

川渕 湧三

世界に唯一の被爆国日本が核兵器禁止条約に署名をしないのか。日本の将来はどうなるのか憂いて詠んだ一首である。

佳作 (五名)

山下昭文、うちだゆみ、佐野美麗 (清和女子中)、

山本莉緒 (附属中)、池田育子

(審査員——梶田順子、文責・中野百世)

俳句審査評

応募人数一九三人。応募句数六八七句。共に前年とほぼ同数であった。最高齢九十五歳。最年少十歳。ご高齢の方の応募は頼もしく、熱心な先生方のご努力で小中学生の投句が多かったのも嬉しいことだった。ただ、その中間の二十代から五十代の投句者が少ないのは、例年のこととは言えまことに残念である。さて文芸賞。

受験期の子は深海の魚となる

中村 竹子

受験を控えた少年が一人机に灯をともして勉強をしているのであろう。多くの子供達が通過しなければならぬ経過ではあるが、青春の一時期を束縛された残酷で可哀想な姿とも言える。受験期の少年の孤独を「深海の魚」ととらえた独自の目に現代的な詩情があり、少年に向けた作者の優しい心がそれを支えている。下句の終わり方など言葉遣いにも新鮮なものがある。奨励賞は五句。

柿の木は残すやうにと生身魂

山本 千秋

盆の慣わしとして死者だけでなく一族の長老を敬ってお祝いをする対象が生身魂。戦後の貧しい時代にも「腹の足し」になった柿の古木は残せと、この長老さんは家族に伝えているのだ。切実さとユーモアもある。

出征の兄は十七木の実降る

浜田 節

悲惨な戦争末期の時代にあつて十七歳という年齢は大変な意味を持っていた。兵士となる最小年齢が十七だったからだ。国の犠牲となることを美学と教えられ、信じ、或いは信じなくとも木の実が降るように簡単に死を強要された世代なのである。遠い昔の話ではない。

花びらは日のすべり台福寿草

島崎 有造

福寿草は新年の季語。ネーミングも目出度く、時には残雪の横から早春の光を鮮やかに照り返す。あの花ほどに光を感じさせ、光に似合う花はない。そんな花の様子を「日のすべり台」と表現したのは的確で洒脱。

鷹渡るをりをり高き礁波

大窪 雅子

土佐の海辺の山々から遙かな南方へ飛び立つのは差羽と呼ばれる小型の鷹。十月の青空へ螺旋を描いて登り気流に乗って立つ姿は感動的だ。眼下では沿岸の磯の礁に白い波が高く低く打ち返している。大きな景色。

宿題が終わらないよと泣く風鈴

植木 穂花

多分多くの子供が経験するだろう夏休みの様子を普通に述べている。が、下句で風鈴という季語を上手く使って鳴るものを「泣く」と擬人化し、実感を踏まえたユーモアを醸し出したところに工夫がある。俳句の眼だ。

(審査員——植田紀子、橋田憲明、文責・味元昭次)

川柳審査評

今年の川柳部門の応募総数は六百一句、昨年よりも大幅に増加した。今年の応募作品は、穏やかな言い回しによる十七音字が目についた。今年もジュニアの応募が多かった。指導もさることながら、投句をまとめられた先生に感謝したい。慎重に審査にあたり、次のように受賞作を決めた。文芸賞は次の一句。

シニアカー少年兵は美しい

大野 充彦

夕陽に向ってシニアカーをゆっくり走らせる老人がいる。背筋はぴしと伸びて、凜としている。戦争末期に少年兵として、戦争を体験した過去を持つ。少年兵のたまたまいを残したまま、今を生きている。「美しい」という形容詞以外には当てはまらない姿である。戦争体験者が少なくなってきた今を切り取った秀句。次に、文芸奨励賞。

飽食の国に生まれて火の匂い

吉尾 光生

東京オリンピックでは十三万食の弁当が捨てられたと聞く。食べるものにはもちろん困らない、豊かな時代になった。だから、みんな満ち足りているかというと、不安や不満は決して少なくはない。地球温暖化、新型コロナウイルス感染症の蔓延、今の豊かさは仮のものではないか、そんな気持ちになる。爆発寸前の危うさを感じるのだ。

枝豆や低い目線のままで行く

井上 志津

枝豆は成熟する前に収穫される。すくっと伸びた姿を見

ることはない。高圧的な物言いにげんなりすることがある。「上から目線」という言葉もある。もっと共感を持ったものの見方、やりとりがあったらいいのと感じる。私は低い目線のまま生きて行くのだという気持ちを、枝豆と取り合わせたところが新鮮だ。

立ち枯れの父を私は笑わない

森本 幸美

なんと優しい句だろうか。表現は丸くはないが、心持ちはじーんと伝わってくる。まるで立ち枯れの木のように、父が老いてきた。動作も思考も、かつての父ではない。今までの父を思うと、感謝の気持ちは大きい。父の今も大好き、「お疲れ様」と声をかけたい。

鉛筆と同じ私はBの芯

富士田 三郎

鉛筆の芯の硬さと濃さは、H・F・Bとで十七種類ある。Hは硬く、Bは6Bまで柔らかく濃くなる。子どもの頃はBか2Bだが、大人になると硬いものを使うことが多い。私はBの芯の柔らかさ温かさが好きだ。私自身の生き方もそんな位置のような気がする。

ひまわりはおひさまでるとみなきりつ

森口 咲空

「みなきりつ」が素晴らしい表現。ひまわりと太陽の組み合わせを、小学生の目はひまわりが揃って起立すると見たのが面白い。すべて平仮名で十七音字が書かれているが、びたつと読み手に入ってくる。ひまわりの一面の黄色の光景が、目の前に広がってくる。

(審査員——清水かおり、文責・小笠原望)

令和三年度高知県文芸賞 作品募集要項

五、締切日

令和三年九月三十日（木）当日必着

一、趣旨

高知県文芸賞は、広く県民の皆様から作品を公募して、すぐれた作品を顕彰し、地方文化の発展と本県文芸の振興を図ることを目的としています。

二、主催

高知県・（公財）高知県文化財団

三、主管

高知県芸術祭執行委員会
（事務局（公財）高知県文化財団内）

四、公募作品の部門

短編小説	一人一編
詩	一人一編
短歌	一人三首以内
俳句	一人五句以内
川柳	一人五句以内

六、作品送付先

〒七八一―八一二三 高知市高須三五三―二
（公財）高知県文化財団内
「高知県芸術祭執行委員会事務局」あて

七、発表

令和三年十一月上旬に本人及び報道機関あてに通知します。（令和三年十二月十二日に表彰式を行います。）

八、選賞

・短編小説
「高知県文芸賞」一名
「高知県文芸奨励賞」二名
・他の部門
「高知県文芸賞」一名
「高知県文芸奨励賞」五名
その他、佳作が選出される場合もあります。
受賞者には表彰状と副賞が授与されます。

九、応募時の注意事項

・類似（類想）作品の存在が明らかになった場合や、盗作が疑われる場合は、賞の発表後でもこれを取り消すことがあります。その場合に発生した著作権侵害に関わる問題は、応募者の責任となります。また、取り消しにより生じた損害（経費）については応募者に負担していただきます。

十、応募条件

未発表作品に限り、応募者は高知県在住者に限ります。

＊私的な会や学習会で発表した作品、メンバー内での回覧、資料とするための目的で活字化した作品は「未発表」とみなします。

＊その他、前記の基準等に則して、事務局が判断する場合もありますので、ご了承ください。

十一、作品への記載事項

①部門名 ②氏名（フリガナ）＊ペンネームご使用の場合は併記 ③住所 ④電話番号 ⑤年齢
を必ず明記してください。記載場所等は部門ごとに異なります。

鉛筆またはシャープペンシルの場合は、HB以上で濃くはつきり書いてください。

十二、部門ごとの注意事項

短編小説

■作品本文は四百字詰原稿用紙十枚。

■パソコンの場合、二十字×二十行で設定してください。

■必ず、作品本文にページ番号をふってください。

ホッチキス留めは不要。

・一枚目…タイトルを明記

・二枚目…十一枚目…作品本文

・十二枚目…部門名・氏名・住所・電話番号・年齢を明記。

詩

■作品本編は四百字詰原稿用紙二枚、三十七行以内。

・一枚目…一行目上方に部門、作品名、二行目下方に氏名を明記。

（三行目はあけて）四行目から作品本文を書き始めてください。

・三枚目…住所・電話番号・年齢を明記。

短歌・俳句・川柳

■通常はがきを使用してください。

※学校から、まとめて応募の場合は、はがきサイズの用紙へ記入しても可。

その際、ご担当教諭名を封筒に記入してください。

■全部門とも自由題。作品は楷書・タテ書きで書いてください。

・はがき表面に部門名を必ず記入してください。

・氏名・住所・電話番号・年齢は作品末尾に記入してください。

*応募作品は返却しません。

*個人情報、運営上の管理及び本人への連絡の用途に限り、利用させていただきます。

ただし、入選作品については、在住市町村名、氏名、年齢を公表します。

三、審査員（五十音順）

短編小説	杉本 雅史	米沢 朝子	若江 克己
詩	小松 弘愛	長尾 軫	林 嗣夫
短歌	梶田 順子	中野 百世	
俳句	植田 紀子	橋田 憲明	味元 昭次

川 柳…小笠原 望 清水 かおり

両、問い合わせ先

「高知県芸術祭執行委員会事務局」

（公財）高知県文化財団内

（TEL）〇八八—八六六—八〇一三

二〇二一年十二月十二日 発行

編集発行 高知県芸術祭執行委員会

事務局 高知県高知市高須三五—二

（公財）高知県文化財団内

印刷所 高知市城山町三六

西 富 騰 写 堂

（非 売 品）

